



## 唐代「送葬詩」の周辺

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2008-05-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 後藤, 秋正 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.32150/00005077">https://doi.org/10.32150/00005077</a>

# 唐代「送葬詩」の周辺

後藤 秋正

『文苑英華』卷三百五、悲悼五、送葬の項には、左記の十二篇の詩が収録されている。

- ① 和楊侯送袁金紫葬 張正見
  - ② 送靈法師葬 庾信
  - ③ 送觀寧侯葬 王褒
  - ④ 送劉中書葬 王褒
  - ⑤ 望送魏徵葬 太宗・李世民
  - ⑥ 送柳宜城葬 顧況
  - ⑦ 送開府姪隨故李使君旅櫬却赴上都 劉長卿
  - ⑧ 送魏六侍御葬 皇甫冉
  - ⑨ 觀葬者 權德輿
  - ⑩ 觀朱舍人歸葬吳中 陳羽
  - ⑪ 咸通中始聞褚河南歸葬陽翟是歲上平徐方大肆慶賞又詔八品錫其裔孫追叙風概因成二十韻 唐彦謙
  - ⑫ 淮口軍葬 羅隱
- このうち、①⑥と⑧、及び王維「送殷四葬」の八篇については既に論じ

たことがある<sup>1)</sup>。それらの拙論においては、詩題に「送葬」と明示され、かつ、特定の故人を対象とする作品に限定したこともあって、⑦と⑨⑫の各篇には言及しなかった。このほか、明・張之象纂輯『唐詩類苑』卷六十、礼部送葬の項には前記⑥⑧のほか、李遠（？―八六〇？）の「觀廉女真葬」詩を収めている。また、これらの総集には収められないが、韋応物（七三七―七九三？）の「送終」詩、歐陽詹（七五八？―八〇一？）の「觀送葬」詩も、送葬を主題としている。

そこで、本稿においては、送葬と葬儀にまつわる感慨を主題とする、韋応物の「送終」詩と歐陽詹の「觀送葬」詩、及び李遠の「觀廉女真葬」の三篇と、これに権徳輿（七五九―八一八）の「觀葬者」、羅隱（八三三―九〇九）の「淮口軍葬」詩を加えた五篇の詩を取り上げて考察を加えようと思う。なお、⑦⑩のような「旅櫬」もしくは、「帰櫬」に関わる感慨を詠ずる詩<sup>2)</sup>は、送葬詩のうちにあつて別の一群を形成していると考えられるので、これについての考察は別稿に譲りたい。

まず韋応物の「送終」詩<sup>3)</sup>を見よう。この詩は『韋蘇州集』卷六、感嘆の部

に収められており、その冒頭の「傷逝」詩の題下注に、「此後歎逝哀傷十九首尽同徳精舎旧居傷懷時所作。」（此の後の歎逝・哀傷の十九首は尽く同徳精舎の旧居にて傷懷せし時に作る所。）と言うように、洛陽東郊の寺で病氣の療養をしていたときに、妻の死を傷んだ作品を中心としている。

奄忽踰時節 奄忽として時節踰ぎ

日月獲其良 日月 其の良きを獲たり

蕭蕭車馬悲 蕭蕭として車馬は悲しみ

祖載発中堂 祖載して中堂より発す

生平同此居 生平 此の居を同じくするも

一旦異存亡 一旦 存亡を異にす

斯須亦何益 斯須するも亦何の益かあらん

終復委山岡 終に復た山岡に委ぬ

行出国南門 行きて国の南門を出で

南望鬱蒼蒼 南望すれば鬱として蒼蒼たり

日入乃云造 日入りて乃ち云に造る

慟哭宿風霜 慟哭して風霜に宿し

晨遷俯玄廬 晨に遷して玄廬に俯す

臨訣但遑遑 訣れに臨みて但だ遑遑たるのみ

方当永潜翳 方に永く潜み翳るるに当って

仰視白日光 仰いで白日の光を視る

俯仰遽終畢 俯仰すれば遽に終に畢り

封樹已荒涼 封樹 已に荒涼たり

独留不得還 独り留まりて還るを得ず

欲去結中腸 去らんと欲して中腸結ばる

童稚知所失 童稚は失う所を知り

啼号捉我裳 啼き号びて我が裳を捉う

即事猶蒼卒 事に即きては猶お蒼卒たり

歲月始難忘 歲月 始めより忘れ難し

この詩には『文選』を典拠とする語が多いように見受けられる。まず、この点に留意しながら、第一句から見てみよう。

第一・二句は、埋葬の期日を下して、その当日になったことを言う。「奄

忽」の語は『文選』にしばしば見えるが、李陵「与蘇武三首」(其の二)の、

仰視浮雲馳 仰いで浮雲の馳するを視るに

奄忽互相踰 奄忽として互いに相い踰ゆ

という句を意識し、さらには「古詩十九首」(其の四)にある次の句、

人生寄一世 人生 一世に寄る

奄忽若飄塵 奄忽として飄塵の若し

あるいは同じく「古詩十九首」(其の十一)にある、

奄忽随物化 奄忽として物に随いて化す

榮名以為宝 榮名以て宝と為さん

という句をも念頭に置くかもしれない。「蕭蕭」の語は、『文選』に収録される詩では、「白楊」と結びついて用いられることが多い。「古詩十九首」(其の十三)にある、

驅車上東門 車を上東門に駆りて

遙望郭北墓 遙かに郭北の墓を望む

白楊何蕭蕭 白楊 何ぞ蕭蕭たる  
松柏夾広路 松柏 広路を夾む

という句、同じく〈其の十四〉の、

白楊多悲風 白楊に悲風多く  
蕭蕭愁殺人 蕭蕭として人を愁殺す

という句、それに陶淵明「挽歌詩」〈其の三〉の、

荒草何茫茫 荒草 何ぞ茫茫たる  
白楊亦蕭蕭 白楊も亦蕭蕭たり

という句などがそれである。「車馬悲」と類似する表現はしばしば見られる。例えば、曹植「王仲宣誄」には、「靈輜迴軌、白驥悲鳴。」（靈輜は軌を廻らし、白驥は悲鳴す。）とあり、潘岳「寡婦賦」には、

輪按軌以徐進兮 輪は軌を按じて以て徐に進み  
馬悲鳴而踟顧 馬は悲鳴して踟顧す

と言うし、陶淵明「挽歌詩」〈其の三〉にも、

馬為仰天鳴 馬は為に天を仰いで鳴き  
風為自蕭條 風は為に自ら蕭條たり

という表現がある。「祖載」は、初めてひつぎを靈車に載せて出すことである。陸機「挽歌詩三首」〈其の一〉に、

死生各異倫 死生 各おの倫を異にし  
祖載<sup>ま</sup>当有時 祖載 当に時<sup>ま</sup>有るべし

と言う。「存亡」は特殊な語ではないが、潘岳「寡婦賦」には、

痛存亡之殊制兮 存亡の制を殊にするを痛み  
將遷神而安厝 將に神を遷して安らかに厝<sup>お</sup>かんとす

と言ひ、同じく「夏侯常侍誄」には、「存亡永訣、逝者不追。」（存亡は永く訣れ、逝く者は追われず。）と言ふ。「斯須」も特殊な語ではないが、ここは、しばらく立ち止まる、ぐずぐずするの意で用いられている。李陵「与蘇武三首」〈其の一〉に、

長当從此別 長く当に此れより別るべし  
且復立斯須 且し復た立ちて斯須せん

とある。「山岡」は『文選』に三例あり、これを墓所の意で用いる例は、阮籍「詠懷詩十七首」〈其の十〉に、

寒風振山岡 寒風は山岡に振るい  
玄雲起重陰 玄雲は重陰を起こす

と見えている。また、同じく「詠懷詩十七首」〈其の十一〉には、

丘墓蔽山岡 丘墓は山岡を蔽い  
万代同一時 万代 同じく一時なり

という表現も見えている。「鬱蒼蒼」という表現は、『文選』には次の二例のみが見えており、いずれも樹木について言う。

月出照園中 月出でて園中を照らし

珍木鬱蒼蒼 珍木 鬱として蒼蒼たり 劉楨「公讌詩」

太谷何寥廓 太谷何ぞ寥廓たる

山樹鬱蒼蒼 山樹鬱として蒼蒼たり 曹植「贈白馬王彪」詩〈其の二〉

「玄廬」は、死者の住まい、つか穴であり、曹植「曹嗒誄」(『文選』卷二八、陸機「挽歌詩三首」(其の二 李善注引)の「痛玄廬之虚廓。」(玄廬の虚廓なるを痛む。)という用例が早いものであろうが、『文選』にはこれを踏まえた陸機「挽歌詩三首」(其の二)の、

重阜何崔嵬 重阜 何ぞ崔嵬たる

玄廬窺其間 玄廬 其の間に窺る

という一例のみが見える。「潜翳」は、すがたをかくすこと。潘岳の「寡婦賦」に、

窈冥兮潜翳 窈冥に潜み翳れ

心存兮目想 心に存して目に想う

とあり、同じく「悼亡詩三首」(其の三)に、

奈何悼淑儷 奈何せん淑儷を悼むこと

儀容永潜翳 儀容は永く潜翳しぬ

と見える。「仰視」はすでに李陵「与蘇武三首」(其の一)に見えていた。

「荒涼」は、例えば孔稚珪「北山移文」に、「石逕荒涼、徒延佇。」(石逕は荒涼として、徒に延佇す。)とある。「結中腸」は二例あり、死の悲哀と結びくのは、謝靈運「廬陵王墓下作」詩にある、

眷言懷君子 眷みて言に君子を懐い

沈痛結中腸 沈痛は中腸に結べり

という例である。幼い遺児に言及する例は、例えば潘岳「寡婦賦」に、

省微身兮孤弱 微身の孤弱なるを省み

顧稚子兮未識 稚子の未だ識らざるを顧みる

とある。「蒼卒」は、倉卒に同じ。いくつかの例があるが、曹植「贈白馬王彪」詩には、次のように言う。

倉卒骨肉情 倉卒にして骨肉の情

能不懷苦辛 能く苦辛を懐かざらんや

韋応物のこの詩については、潘岳「悼亡詩三首」や「古詩十九首」の影響が指摘されている。確かにそういった側面はあるが、これに加えて曹植「贈白馬王彪」詩、潘岳「寡婦賦」、陸機「挽歌詩」などの影響を考えてもよいであろう。韋応物は、『文選』所載の悲哀を詠する諸篇を特に後半部分に吸収していたのである。また、潘岳の「悼亡詩三首」は、送葬と埋葬の当日のことからはまったく詠じない。潘岳が送葬と埋葬を詠するのは「哀永逝文」(『文選』卷五七)であって、そこでは祖載から送葬・埋葬のようす、そして埋葬が終わって殯宮に反哭するまでの悲しみが詳細に描写される。詩にお

いて、もっぱら送葬の場面が詠じられるのはむしろ挽歌詩である。当然これらの作品も韋応物の脳裏にはあったであろう。韋応物は多くの悼亡詩を制作する中で、「送終」の一篇を送葬の場面の描写にあてたのである。そういった意味では、これが唐代において妻の送葬を詠じた初めての詩であって、規範となる詩は唐代においては見出せない。そのことが韋応物の視線を必然的に『文選』に向かわせた理由にもなっているであろう。またいっぽう、中原健二「詩人と妻―中唐士大夫意識の一断面」は韋応物の悼亡詩について、次のように指摘している。

最も重要なのは、潘岳をはじめこれまでの作品では妻の死という「現在」に纏わりついて離れなかった時間が、妻との往時の生活という「過去」へと流れはじめていることである。

しかしながら、この「送終」にはそのような側面がうかがわれないのも、『文選』を強く意識したことが、逆に拘束として働いていたとも言えよう。

三

ついで、権徳輿の五律、「観葬者」を見よう。

塗芻随昼哭 塗芻 随いて昼に哭し  
 数里至松門 数里 松門に至る  
 貴尽人間礼 人間の礼を尽くすを貴ぶも  
 寧知逝者魂 寧ぞ逝く者の魂を知らん  
 笳簫出古陌 笳簫 古陌に出で  
 煙雨閉寒原 煙雨 寒原を閉ざす  
 万古皆如此 万古 皆な此の如し  
 傷心反不言 傷心 反つても言わず

「塗芻」は、どろで作った車である塗車と、茅を束ねて作った人形と馬である芻靈。いずれも、送葬に用いた。『礼記』檀弓下に、「塗車芻靈、自古有之。明器之道也。」（塗車・芻靈は、古より之有り。明器の道なり。）とあり、王維「故西河郡杜太守輓歌三首」〈其の三〉に、

塗芻去国門 塗芻 国門を去り  
 秘器出東園 秘器 東園より出づ

と云う。「昼哭」は、昼間に哭すること。これも『礼記』檀弓下に、「穆伯之喪、敬姜昼哭。文伯之喪、昼夜哭。孔子曰、知礼矣。」（穆伯の喪に、敬姜昼に哭す。文伯の喪に、昼夜哭す。孔子曰く、礼を知れりと。）とある。魯の大夫、公甫靖の喪のときに、妻の敬姜が、礼法どおり昼間だけ哭して、夜間は哭さなかったことを言うが、ここは送葬が古礼に則って行なわれていることを言う。「松門」は、松が並木のように植えられている道であり、謝靈運「入彭蠡湖口」詩に、

攀崖照石鏡 崖に攀じて石鏡に照らし  
 牽葉入松門 葉を牽きて松門に入る

と云うが、ここは墓地の入り口を言うのであろう。「笳簫」は、成公綏「嘯賦」に、

衆声繁奏 衆声 繁奏すれば  
 若笳若簫 笳の若く簫の若し

とあるが、杜甫「哭韋大夫之晋」詩に、

帘幕旋風燕 帘幕 風燕旋り  
笳簫咽暮蟬 笳簫 暮蟬咽ぶ

とあるように、ここでは送葬の音楽を奏でる管楽器を言う。「煙雨」は、けむるように降る雨。鮑照「看漏賦」に、

聊弭志以高歌 聊か志を弭めて以て高歌し  
順煙雨而沈逸 煙雨に順いて沈逸す

と見える。「寒原」は、冬の寒々とした原野。「東討下符」(『宋書』卷八四、鄧琬伝)に、「雲羅四掩、霜鋒交集、猶勁颯之払細草、烈火之掃寒原。」(雲羅 四もに掩い、霜鋒 交ごも集まる、猶お勁颯の細草を払い、烈火の寒原を掃うがごとし。)とある。「万古」は、遠い昔。顧愿「定命論」に、「皆理定於万古之前、事徴於千代之外。」(皆な理は万古の前に定まり、事は千代の外に徴らかなり。)と云う。

『升菴詩話』卷四、晚唐兩詩派の条は、「温庭筠・権徳輿学六朝。」(温庭筠・権徳輿は六朝を学ぶ。)と指摘しているが、この詩においてはこれまで見たように、第一句こそ『礼記』檀弓下を強く意識するが、特定の典拠への傾斜はうかがえない。頷聯においてもそうだが、死の悲哀を味わったときには、かえって言葉にはならないのだという末尾の発言からは、形式化した葬礼への彼の批判的なまなざしが感じられる。いっぽうで、『旧唐書』卷百四十八の本伝には、権徳輿がいわゆる哀祭文を善くしたことについて、次のような指摘がある。

其文雅正而弘博、王侯相将洎當時名人薨没、以銘紀為請者什八九、時人以為宗匠焉。

其の文は雅正にして弘博、王侯・相将洎び當時の名人の薨没するや、銘紀を以て為に請う者、什に八九、時人以て宗匠と為す。

権徳輿は十六歳の時に既に「唐故潤州丹陽丞盧君墓誌銘」を撰している。彼は墓誌銘などの哀祭文を多く残しているほかに挽歌も多作しており、『全唐詩』には、「徳宗神武孝文皇帝挽歌詞三首」「順宗至徳大安孝皇帝挽歌三首」など十一篇が収録される。このうち「順宗至徳大安孝皇帝挽歌三首」の自注には、「時充鹵簿使。」(時に鹵簿使に充てらる。)と云うように、元和元年(八〇六)七月、順宗を豊陵に葬るに際して、戸部侍郎に鹵簿使を兼ねたときに職責をもって制作したものである。彼の哀祭文は個人的な関係で撰述を依頼されたものもあつただろうが、職務上の必要に迫られて制作したものも多かつたに違いない。「観葬者」は、哀祭文を多作した彼が、職務を離れて送葬を見たときに感じた本心を詠じたものと言えるであろう。

#### 四

次に、貞元八年(七八〇)、韓愈と同年の進士である歐陽詹の七絶「観送葬」を見てみよう。

何事悲酸淚滿巾 何事の悲酸ぞ涙巾に満つる  
浮生共是北邙塵 浮生 共に是れ北邙の塵  
他時不見北山路 他時 見ずや北山の路  
死者還曾哭送人 死者も還た曾て哭して人を送りしを

この詩に、特に難解な語は見られないが、いくつかの典拠を確認しておく。「悲酸」は、悲しく痛ましいこと。王羲之「雜帖」に、「無由敘哀、悲酸。」(哀しみを敘ぶるに由無し、悲酸なり。)と見える。「浮生」は、流れて浮かんでいるかのようにはない人生。『莊子』刻意篇の、「其生若浮、其死若休。」(其の生や浮かぶが若く、其の死や休うが若し。)の語を出典として用例は多いが、例えば鮑照「答客」詩に、

浮生急馳電 浮生 急なること馳電のごとく  
物道險絃絲 物道 険なること絃絲のごとし

などと見える。「北邙」は、洛陽の北方に東西になだらかに連なる丘陵地帯だが、ここでは墓地を言う。この詩のように墓地を指すものとしては陶淵明「擬古詩九首」〈其の四〉にある、

一旦百歳後 一旦 百歳の後  
相与還北邙 相与与に北邙に還る

という用例が早いものであろう。この詩に詠じられる感慨は、早くは「古詩十九首」〈其の十三〉に詠じられた、次のような感懐と共通している。

人生忽如寄 人生は忽として寄の如く  
寿無金石固 寿に金石の固き無し  
万歳更相送 万歳 更にも相い送り  
聖賢莫能度 聖賢も能く度ゆること莫し

五

次に李遠の五律「観廉女真葬」(『全唐詩』卷五一九)を見ておこう。李遠は夔州雲安(四川省雲陽県)の人。大和五年(八三二)の進士。建州刺史、岳州刺史などを歴任したのち、大和十二年に杭州刺史となり、御史中丞に終わった。詩題にいう「廉女真」という女性について詳細は不明である。ただ、『全唐詩』の題下注には、「女真善隸書、常為内中学士。」(女真是隸書を善くし、常て内中学士と為る。)とあり、李之亮『李遠詩注』(上海古籍出版社、一九八九)はこの注を引いて、「廉女真、女道士、生平不詳。『唐才子伝』卷

二有道士廉氏、不知是否即此人。」と言う。また、高世瑜著小林一美・任明訳『大唐帝国の女性たち』(岩波書店、一九九五年)は、「六宮の宮官の他に、宮中には内文学館があり、宮人の中の文学の教養ある者を選んで学士とし、妃嬪や宮人に教養、読み書き、算術などを教育する仕事を担当させた。……宮人の廉女真是隸書をよくし、宮中の学士に任じられたこともあった。……これら宮官の中のある者は品級が高く、権勢があり、宮中で尊ばれたばかりか、はては外廷の官僚さえも彼女たちに取り入って功名を圖ろうとした。」と述べている。

玉窗抛翠管 玉窗 翠管を抛ち  
輕袖掩銀鸞 輕袖 銀鸞を掩む  
錯落雲車断 錯落として雲車断え  
丁冷金磬寒 丁冷として金磬寒し  
鶴尋深院宿 鶴は深院を尋ねて宿り  
人借旧書看 人は旧書を借りて看る  
寂寞焚香处 寂寞たり焚香の処  
紅花滿石壇 紅花 石壇に満つ

この詩は葬儀を詠じていながら、女道士が対象であるために、華やかで、仙界を想起させる語が多く見られる。「玉窗」は、女性の部屋のまど。簡文帝蕭綱「又三韻」詩に、

何時玉窗裡 何れの時か玉窗の裡  
夜夜更縫衣 夜夜 更に衣を縫わん

と言い、王維「班婕妤三首」〈其の二〉には、



玉牕螢影度 玉牕 螢影度り  
金殿人声絶 金殿 人声絶ゆ

と云う。「翠管」は、緑色の軸をもつ毛筆であろう。類似した表現は、傅玄「筆賦」に、次のように見えている。

嘉竹翠色 嘉竹 翠色あり  
彤管合丹 彤管 丹を含む

「銀鸞」について、『李遠詩注』は、まず「指草書筆力的飄逸。」と言って「草書」の書きぶりの飄逸さを言うとし、『晋書』卷六十、索靖伝に載せる「草書状」の、「蓋草書之状也、婉若銀鈎、漂若驚鸞。」（蓋し草書の状たるや、婉として銀鈎の若く、漂として驚鸞の若し。）という一節を引き、さらに、「又、或指衣袖上の图案。」と言って、李賀「唐兒歌」の次の句を引いている。

竹馬梢梢揺緑尾 竹馬 梢梢として緑尾揺らぎ  
銀鸞眩光踏半臂 銀鸞 眩光して半臂を踏む

ここは、「玉窗」のもつで「翠管」をふるい、「輕袖」を翻らせて隸書を書いていた廉女真の姿が見られなくなったことを言うのであろう。ちなみに、「輕袖」の語は、類似の表現が曹植「洛神賦」に、

揚輕桂之猗靡兮 輕桂の猗靡たるを揚げ  
翳脩袖以延佇 脩袖を翳かきして以て延佇す

と見える。「錯落」は光が入り交じるさま。崔顥「古游侠呈軍中諸將」詩に、

錯落金鎖甲 錯落す金鎖の甲  
蒙茸貂鼠衣 蒙茸たり貂鼠の衣

と云い、李賀「春婦昌谷」詩に、

官台光錯落 官台 光 錯落  
装画遍峰嶠 装画 峰嶠に遍し

と云う。「雲車」は、仙人の乗る車であり、『淮南子』原道訓に、「昔者馮夷大丙之御也、乘雲車入雲蜺、游微霧。」（昔者 馮夷・大丙の御するや、雲車に乗り雲蜺に入り、微霧に遊ぶ。）と云い、曹植「洛神賦」に、

六龍儼其齊首 六龍 儼として其れ首を齊しくし  
載雲車之容裔 雲車の容裔たるに載る

と云う。「丁冷」は、水のしたたる音だが、ここは、すずやかな楽器の音を言うのであろう。この一聯は、廉女真が雲車に乗って登仙し、あとにはすずやかな音を奏でる金磬だけが残されたことを言う。「鶴尋」の句ははつきりしないが、廉女真が逝ったあと、旧居に鶴が訪ねてきたことを言うのであろうか。鶴も仙人の乗り物であった。例えば『相鶴経』（『芸文類聚』卷九〇）に、「鶴、陽鳥也、而遊於陰、蓋羽族之宗長、仙人之騏驥也。」（鶴は、陽鳥なり、而して陰に遊ぶ、蓋し羽族の宗長にして、仙人の騏驥なり。）と云う。「焚香処」は、廉女真が香を焚いていたところ。杜甫「冬到金華山觀因得故拾遺陳公學堂遺跡」詩に、

焚香玉女跪 焚香 玉女跪ひざますき  
夢裏仙人來 夢裏 仙人來る

と言う。これらの語はいずれも女道士としての廉女真を描写するのにふさわしい。「紅花」は、紅華と同じ。司馬相如「上林賦」に、

揚翠葉 翠葉を揚げ  
扒紫莖 紫莖を扒かし  
發紅華 紅華を發ひらき  
垂朱榮 朱榮を垂る

とあり、杜甫「風雨看舟前落花戲為新句」詩に、

影遭碧水潛勾引 影は碧水に遭いて潜かに勾引せられ  
風妬紅花卻倒吹 風は紅花を妬みて卻かえって倒吹す

とあるなど、用例は多い。「石壇」は、石で築いた祭壇。『漢書』卷二十五下、郊祀志下に見える匡衡の発言に、「紫壇偽飾女樂・鸞路・騂駒・龍馬・石壇之屬、宜皆勿修。」（紫壇 偽りて女樂・鸞路・騂駒・龍馬・石壇の屬を飾るは、宜しく皆な修むること勿れ。）と見えており、庾信「周隴右總管長史贈太子少保豆盧公神道碑銘」にも、「石壇承祀、豐碑頌靈」（石壇 祀を承け、豐碑 靈を頌す）と見えている。

この詩における女性の死の詠じ方は、仙界との関連こそ直接的には詠じていないものの、「香」と「花」の対比の仕方など、梁の簡文帝蕭綱の「傷美人詩」（全二二句）と類似している。後半六句を引いてみよう。

凶形更非是 凶形 更に是に非ず  
夢見反成疑 夢に見て反って疑いを成す  
熏鑪含好氣 熏鑪 好気を含み  
庭樹吐華滋 庭樹 華滋を吐く

香燒日有歇 香燒かれて日び歇とどまること有り  
花落無還時 花落ちて還る時無し

『唐才子伝』卷七は李遠の詩について、「為詩多逸氣、五彩成文。」（詩を為りては逸氣多く、五彩 文を成す。）と言う。この点を同じく道士の死を詠じた沈佺期（六五六―七一四）の「哭道士劉無得」詩と比較してみよう。

聞有玄都客 聞く玄都の客有りと  
成仙不易祈 仙と成ること祈もとめ易からず  
蓬萊向清淺 蓬萊 清淺なるに向かい  
桃杏欲芳菲 桃杏 芳菲あらんと欲す  
縮地黄泉出 縮地 黄泉出で  
昇天白日飛 昇天 白日飛ぶ  
少微星夜落 少微 星 夜に落ち  
高掌露朝晞 高掌 露 朝あるかわく  
吐甲龍応出 甲を吐きて龍応に出で  
銜符鳥自歸 符を銜みて鳥自ずから帰る  
国人思負局 国人は負局を思い  
天子惜被衣 天子は被衣を惜しむ  
花月留丹洞 花月 丹洞に留まり  
琴笙下翠微 琴笙 翠微に下る  
嗟来子桑扈 嗟あれあひあひあひ  
爾独返於幾 爾独り幾に返る

典拠をいちいち挙げることは避けるが、沈佺期の詩は『神仙伝』『拾遺記』『列仙伝』などの神仙の伝や、『莊子』知北遊篇、大宗師篇などの隠士の逸話を踏まえて構成されており、道士を哭するのにふさわしい内容をもっている。

しかも、死を直接的に連想させる語が一切用いられていない点も「観廉女真葬」詩と共通している。ただし、沈佺期の詩と比較すると、李遠の詩は確かに「五彩 文を成す」ような色彩感豊かなものとなっていると言えよう。あるいは李遠の詩は、すでに述べたように六朝宮体詩の影響を受けたものであつたかもしれない。

六

最後に羅隱（八三三—九〇九）の七絶、「淮口軍葬」を見ておこう。「淮口」は、汴水が淮水と合流する、泗州の治所が置かれた臨淮県、今の江蘇省盱眙県の西北、淮水の西岸一帯である。この詩の制作は、いわゆる龐勛の乱と関わっている。咸通九年（八六八）七月、南詔の侵入に備えて桂州に駐屯していた徐州出身者を中心とした部隊が、任期の三年が過ぎて六年になっても交替にならないことに不満をもって蜂起した。この時に首領として擁立されたのが、推糧判官の龐勛である。この部隊は勢力を拡大しながら徐州を目指して北上した。九月には徐州を陥れて節度使の崔彦会を殺す。その後、淮口に拠って、周辺の舒州、廬州、沂州、海州、滁州、宿州なども一時的に支配するに至った。この間十二月には、泗州城に孤立した官軍を救援しようとした戴可師の三万の軍が、大敗してほとんど全滅するということもあった。結局、翌年九月、龐勛は康承訓らの率いる官軍のために殺され、当時の河南道（河南省東部、山東省、江蘇省北部）一帯に及んだ反乱は鎮圧される。しかしこれは、やがて勃発する黄巢の乱を準備する大乱であった。この詩は、咸通十年、龐勛の乱が鎮圧されたのち、淮口で軍葬が行なわれたことを聞いて作つたものである。羅隱は前年の科挙に落第して江東に帰っていた。

一陣孤軍不復迴 一陣の孤軍 復た廻らず  
更無分別只荒堆 更に分別無く只だ荒堆あるのみ

莫言賦分須如此 言う莫かれ賦分 須く此の如しと  
曾作文皇赤子来 曾て文皇の赤子作りしを

「荒堆」は、荒れ果てた墳墓を言う。羅隱自身の七絶、「始皇陵」に、

荒堆無草樹無枝 荒堆 草無く樹に枝無し  
嬾向行人問昔時 嬾して行人に向かつて昔時を問う

とある。「賦分」は、天与の定め。天賦。温庭筠「病中書懷呈友人」詩に、

賦分知前定 賦分 前に定まれるを知り  
寒心畏厚誣 寒心 厚誣を畏る

と言う。「文皇」は、初め文と諡され、ついで文武聖皇帝、天寶八年（七四九）には文武大聖大広孝皇帝と諡された太宗李世民を言う。羅隱の、中和元年（八八一）正月、黄巢の来襲を恐れた僖宗一行が成都に蒙塵したことを詠じた七律、「中元甲子以辛丑駕幸蜀四首」（其の四）の頸聯に、

静憐貴族謀身易 静かに憐れむ貴族の身を謀ること易きを  
危惜文皇創業難 危ぶみ惜しむ文皇の業を創むること難きを

と言う。「赤子」は、人民。「漢書」卷八十九、龔遂伝に、「其民困於飢寒而更不恤、故使陛下赤子盜弄陛下之兵於潢池中耳。」（其の民 飢寒に困しみて更 恤えず、故に陛下の赤子をして陛下の兵を潢池の中に盗弄せしむるのみ。）と言う。羅隱にとって李世民の治世は、平穩な日々が続いた唐王朝の象徴であつたのだ。転・結句は、多くの兵士が陣没したのは運命などというものではない、李世民的治下に生を享けていれば、平穩な人生を送ることができた

ものを、と云うのである。この詩には、藩鎮の反乱に揺れる唐末の時代相がそのまま反映していると言えるだろう。

## 七

管見によれば、いずれも北遷した王褒・庾信からその制作が始まった、特定の個人を対象とする送葬詩は、顧況（七二七—八一五）以降はほとんど見られなくなる。しかし、韋応物の「送終」詩は、妻の送葬にまつわる感慨を詠じている点で、これら先行する送葬詩の伝統に連なるものを持っており送葬詩とみなすことができよう。ただし、内容において、自己と関わりのある特定の個人の生前の事績を述べて、哀悼の意を表するものであった送葬詩が、以上に見てきた詩においては、送葬あるいは葬儀に借りて、詩人の率直な死生観を吐露して悲哀を述べるものとなっているように見える。権徳輿の「観葬者」などは、送葬儀礼にこだわる風潮への静かな批判になっているし、また、歐陽詹の「観送葬」も、伝統的な発想を借りながら、永遠に繰り返される送葬の真実を淡々と述べている。しかし、李遠の詩は廉女真という女道士を対象としたためか、色彩感にあふれる語が目立って、死者への哀悼の念はほとんど感じとれない。羅隱の詩は、兵士たちの死を詠じて、晩唐の時代に生きることそれ自体の悲哀を訴えかけるものとなっている。これら送葬詩の周辺に位置する詩は、送葬または葬儀にまつわることがらを詠じながら、先行する一群の送葬詩のように決まった表現形式を持たない、つまりその多様性によってこそ、唐代の膨大な詩群において小さな光芒を放っていると言えるのではないだろうか。

## 注

1 「送葬詩小論—王褒の詩を中心として—」（大塚漢文学会「中国文化—

研究と教育—」五四、一九九六・六）、「送葬詩小論—南北朝末期から唐・太宗李世民へ—」（北海道教育大学語学文学会「語学文学」三五、一九九七・三）、「送葬詩小論—王維・皇甫冉・顧況の詩について—」（北海道教育大学紀要一部A、四七—二、一九九七・二二）。その後、「送葬詩論（二）」（三）と題して、『中国中世の哀傷文学』（研文出版、一九九八・一〇）に収録。

2 返葬・帰葬は挽歌詩に詠じられるほか、次のような詩においても詠じられている。一例を挙げておく。

哭陳歙州

劉長卿

送阿史那將軍安西迎旧使靈柩（一作送史將軍）

王建

葬寶鷄行路士人（一作題旅櫬）

廖有方

別蔡十四著作

杜甫

承聞房相公靈柩自閩州啓殯歸葬東都有作二首

杜甫

送盧十四弟侍御護韋尚書靈柩歸上都二十韻

杜甫

哭嚴僕射歸櫬

杜甫

3 この詩については、前掲「送葬詩小論—王維・皇甫冉・顧況の詩について—」において、王維「送殷四葬」との関連で簡略に触れたことがある。

4 彼の妻が亡くなった時期について、深沢一幸「韋応物の悼亡詩」（颯風の会「颯風」五、一九七三・六）は、「応物の妻が死んだのは、明らかに京兆功曹の時代、つまり永泰元年から大暦十年の間であり、応物は二十九才から三十九才のあいだであった。」と考証している。また、傅璇琮「韋応物系年考証」（『唐代詩人叢考』中華書局、一九八〇所載）は、七八〇年（徳宗・建中元年、四四歳）の条において、「在長安時喪妻、曾有悼亡詩十余首。」と言い、以下のように説明している。

韋集卷六有「傷逝」詩等十余首。「傷逝」詩題下注云、「……。」此注不知為何人所加、其說頗誤。按「傷逝」詩中云、「念我室中人、逝去亦不回。結髮二十載、寶敬如始來。」如為韋応物寓居洛陽同德精舍時作、

則為永泰元年或後數年間所作。永泰元年為公元七六五年、時韋応物二十九歲、則「結髮二十載」、顯然不可能。今按同卷「往富平傷懷」中有云、「昨者仕公府、屬城常載馳」、則顯然指在長安任職之事。其妻當卒于在長安任職時、至于「傷逝」詩題下小注「同德精舍」云云、此同德精舍疑為善福精舍之誤。同卷「同德精舍旧居傷懷」為離洛陽以後重游時所作。詩中云、「洛京十載別、東林訪旧扉。山河不可望、存沒意多違。時遷跡尚在、同去独來歸。」意即謂仕洛陽時与其妻同來、離洛陽時亦同去、今日重又來游、則只有一人。又同卷「出還」述及其妻沒時、家中尚有幼女、「幼女復何知、時來庭下戲。」而後來在滁州所作的「送楊氏女」詩(韋集卷四)也曾提及其幼女、詩中有自注云、「幼女為楊氏所撫育。」由以上所述、可以考定其妻之卒當在長安任職之時。

さらに、呂慧鵬等編『中国歴代著名文学家評伝 第二卷』(山東教育出版社、一九八三)の韋応物の項(執筆は廖仲安)も、「韋応物辞櫟陽令、退居善福寺之原因、除他詩中迄未明言的与黎幹之死的關係而外、和他妻子的死恐怕也有很重要的關係。」と述べたあと、次のように指摘する。

韋集卷六「傷逝」以下十九首都是悼亡之作、從詩中「仕公不及私、百事委令才。」(「傷逝」)……等詩句都說明他妻子的死、是在他作京兆功曹、經常奉令往屬具出差(京兆府轄二十三県)的時候。

また、周嘯天主編『唐詩鑑賞辞典補編』(四川文芸出版社、一九九〇)は、「送終」詩の解説(執筆は姜光鬪)において、「大曆十三年(七七八)冬、韋応物的結髮妻鄭氏去世了、他慘晶泣血、悲愴欲絶地痛呼、……。」と、妻の没年と姓を言うが、依拠した資料は示さない。

5 この点について、前掲深沢論文は、「詩の構想全体がはなはだ相似るという意味で、応物が潘岳の『悼亡詩』を意識し、また模倣したことは疑いない。……応物のそれにおいても『玉台新詠』に収録されるような民歌の影が濃厚である。」と指摘し、中原健二「詩人と妻——中唐士大夫意識の一面」(『中国文学報』四七、一九九三・一〇)も、

全体を通してみれば、季節の移り変りを背景に悲しみをうたっている点など、基本的には潘岳の影響を強く受けているといえるのだが、……十九首がさまざまに角度を変えてうたわれている点も、またこれまでにないことである。

と云う。韋応物の悼亡の諸作を潘岳の「悼亡詩」と比較することは沈德潜『唐詩別裁集』にも見えていて、その卷三には「出還」を載せて、「比安仁悼亡較真。」(安仁の悼亡と比して較真なり。)と云う。また前掲『唐詩鑑賞辞典補編』は、「在芸術上、……、韋応物的悼亡詩、確實是学的選体、他吸取了潘岳悼亡詩的長処、感情深厚而真挚、語言古朴而自然。」と述べる。

6 注5を参照。

7 『文選』所載の挽歌詩などが納棺・葬送・埋葬の三場面を詠み分けていることは、一海知義「文選挽歌詩考」(『中国文学報』一一、一九六〇・四)に詳しい。

8 ただし、王仲鏞『升庵詩話箋證』(上海古籍出版社、一九八七)は、潘德輿『養一齋詩話』卷一〇に見える以下のような異論を引いている。

至謂……、温庭筠・権徳輿学六朝、……、尤不可解。初・盛・中・晚原属後人拘執之見、然沿之者多、亦可借規時代風会。今以権徳輿・李益及韓・柳・元・白為晚唐、則中唐又属何等人乎?況以温庭筠置権徳輿上……、先後倒置矣。豈博雅者所宜出乎?

9 蔣寅「権徳輿年譜略稿」(『大曆詩人研究 下編』中華書局、一九九五所載)は大曆九年(七七四)の項に「唐故潤州丹陽丞盧君墓誌銘」を載せ、以公十六歲少年、得与五十餘歲臯丞游、復為其撰志、可見公時已甚見重于人。盧峴志為文集中年月可考之最上一篇。

と指摘する。

10 『全唐文』は、神道碑等の碑銘を三三篇、墓誌銘等を四八篇、行状を三篇、諡冊文を二篇、祭文を三一篇収録する。この制作数は唐代においては

かなり多いと言つて良からう。

11 韓愈には「歐陽生哀辭」「題哀辭後」があるほか、「太学生何蕃伝」においても歐陽詹の発言を引用する。また、韓愈に「驚驥（一作驚驥吟示歐陽詹）」があり、歐陽詹に「答韓十八驚驥吟」がある。

12 『唐才子伝』巻二には確かに道士の廉氏の名があるが、傅璇琮主編『唐才子伝校箋』第一冊（中華書局、一九八七）巻二、廉氏の条（執筆は傅璇琮）は廉女真との関係を指摘しない。現存する資料からは、この廉氏と廉女真の関連は不明であるとしか言えない。ただし、王建・項斯・張蕭遠・張籍・韋応物に「送宮人入道」詩、戴叔倫に「送宮人入道（一作漢宮人入道）」詩、于鵠に「送宮人入道帰山」詩があることからすると、廉女真ももとは宮女であつて、のちに道観に入つて道士になつたものである。また、「女真」が女道士を指して言うことは、例えば、道士から僧侶となり徳宗の寵愛を受けた韋渠牟（七四九—八〇一）の「歩虚詞一九首」（其の一）（『全唐詩』巻一九）の冒頭にある「道学已通神、香花会女真」（道学已に神に通じ、香花女真に会う）という句からも明らかである。  
なお唐代の女道士については、楊柳『李商隱評伝』（江蘇人民出版社、一九八一、のちに当代中国出版社、一九九七）第一五章、李商隱詩的思想内容、三、艶情詩の項に多くの言及があつて参考になる。

13 前掲『唐才子伝校箋』第三冊の李遠の条（執筆は梁超然）は、この指摘について次のように言う。  
「為詩多逸氣」云云、似係辛氏之評語、亦頗合遠詩之特点。遠今存詩、詞藻豊美、尤善以色彩之詞語点染画面、確有「五彩成文」之況、行文亦稍有飄逸之氣。然遠詩意境稍欠鮮明、詩句亦有重複之病。

14 鈴木修次「齊梁格・齊梁体について」（『加賀博士退官記念中国文史哲学論集』講談社、一九七九）、同じく「唐代における擬魏晉六朝詩の風潮」（『日本中国学会報』三七、一九八五）参照。後者は、

中唐以降の作詩の風潮には、より新しい詩形式、詩形態を求める空気

が、文学者たちの中には脈々と流れており、その新しさを求めるひとつの方向が、盛唐期においてとかく忘れられがちであつた六朝詩の再認識、再検討という方向に向くようになったのではないかとわたくしは考えている。

と指摘する。

15 劉開揚「論羅隱」（『唐詩論文集統集』上海古籍出版社、一九八七所収）は、この詩を「中元甲子以辛丑駕幸蜀四首」「酬丘光庭」「江亭別裴饒」などの詩と同じく、黄巢の乱を反映したものだとしている。ただし羅隱には、龐勳の部隊が北上を始めてからそれほど遠くない時期に作つたと考えられる、次のような「徐寇南逼感事献江南知己次韻」詩がある。

酒闌離思浩無窮 酒闌たけなほなるに離思 浩ひろくして窮り無し

西望維揚憶数公 西のかた維揚を望みて数公を憶う

万里飄零身未了 万里 飄零して身 未だ了おわらず

一家知契意會同 一家 契を知りて意會て同じ

雲横晋国塵底暗 雲 晋国に横たわりて塵底ちりに暗く

路転吳江信不通 路 吳江に転じて信 通せず

今日便成盧子諒 今日 便ち盧子諒と成り

滿襟珠淚望霜風 滿襟の珠淚 霜風に墮つ

16 『唐才子伝』巻九に「錢塘人」と言い、『唐詩紀事』巻六九は「余杭人」と言うが、彼の郷里は浙江新城県欽賢里であることが明らかになっている。

（一九九八・一〇・一六初稿、二〇〇〇・二・一三補稿）